純金箔梨地粉の研究

小　松　芳　光

1. 金梨地の変遷

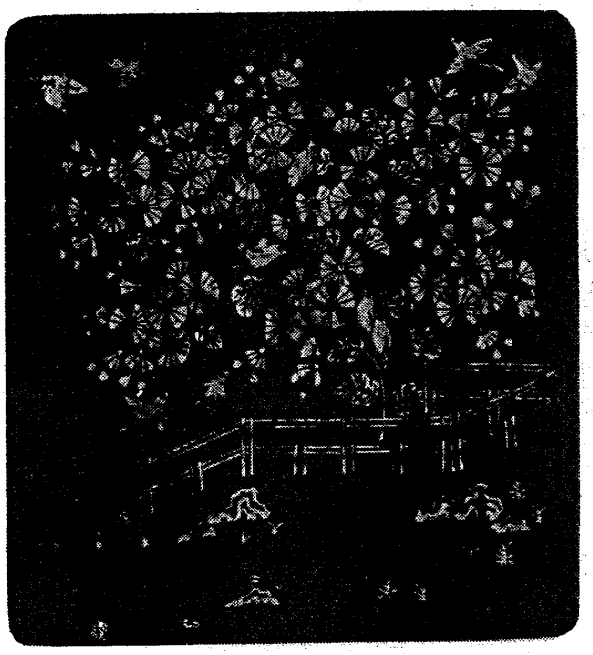
本題に入る前に金梨地の変遷について少し述べて見たいと思う。

蒔絵の技法中に『研出し』と称する技法がある。是は漆で模様を描き金銀の粉末を蒔き乾し更に漆で塗り込んで，特種の木炭で模様を漆の下から研出す魔術的な技法で非常に優雅な感じを与えるものである。奈良朝時代の漆芸中未金鏤，平塵と称するものなど皆この研出しの手法に属するものである。其内の平塵は今日言う平目であり平塵から梨地粉が発生したものと思考されるのである。

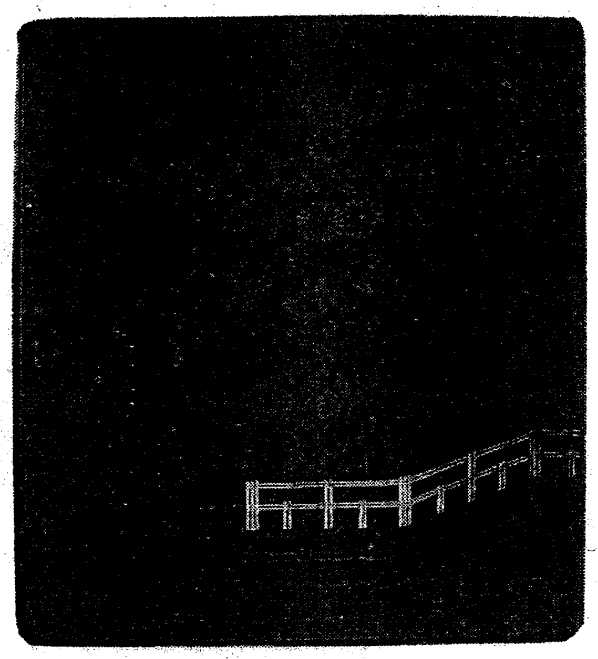
村上帝の頃（西暦1000）『梨地錦の釼を帯びた』とあり，梨地の語が文献に現われた最古のものであろう。村上帝は平安上期だから例え梨地粉が製産されて居ても，相当厚味もあり形に於ても平目粉と大差ないものと推察される。

国宝汰懸地籬菊螺鈿硯箱　鎌倉時代

蓋　表



蓋　裏

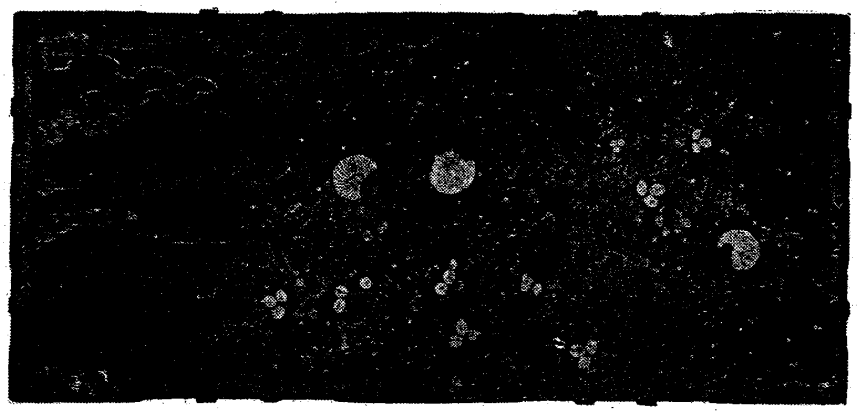


表一面沃懸地となし螺鈿文様の部分を剝ぎ落し，平文の様な感覚を現わしてあり，蓋裏は身の中と同様梨地の中に籬に菊の研出し蒔絵を施してあり，水滴其他善美を尽したものである。

言う迄もなく鎌倉時代は一応蒔絵の技法の完成を見た時代であって，梨地も技工上相当の進歩を見た。しかし蒔絵の中に梨地が重要な地位を占めるに至ったのは桃山期以後である。特に

応仁乱以後漆工技法が非常に簡素となって平蒔絵が流行した。そしてこの時代の障壁画の装飾趣味的影響を受け漆芸も一層装飾的となって，梨地の美を素晴しい感覚で取入れて居る。簡素で自由な平蒔絵と梨地の配合は遂いに華麗な『高台寺蒔絵』の新傾向を現出した。高台寺蒔絵の中で梨地の受持つ役割は大きい。

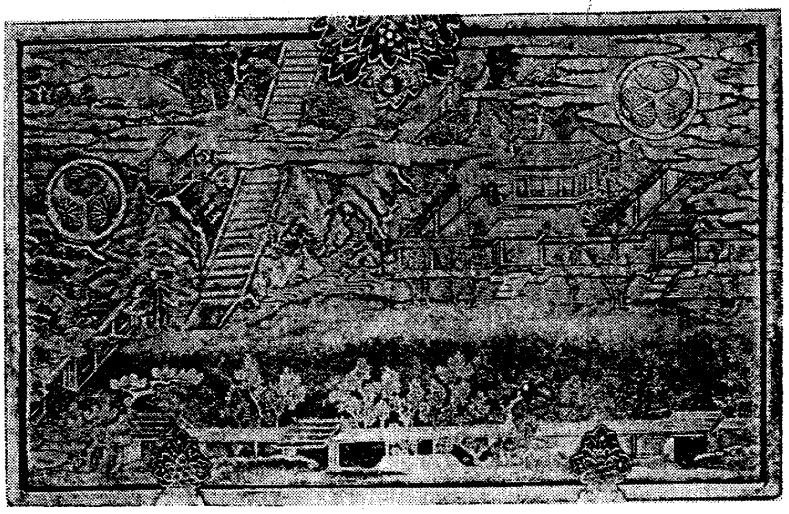
秋草蒔絵八足机　桃山時代



写真は，桃山時代遺作中の白眉と云われるものである。黒塗りにして甲板に土坡に秋草及び雲の蒔絵を繊細な土佐風に描き真盛りの菊の花や，空の雲萩の葉など梨地を多量に使って描かれ，細き金線にて輪廓をくくり，素晴しく装飾的好果を挙げて居る。

前述の様に桃山の装飾性に主役となった梨地の用途は，次期徳川の精致を極めた『総梨地』へと益々応用価値を広められて行った。特に江戸時代の総梨地の上に描た華麗な，山水模様の肉合(シシアイ)蒔絵の硯筥，手箱，書棚等の流行は数百年の永きに渡って賞玩され，陶磁の結晶釉によく似た梨地の美しさは，現代人をも引きつけて厭きぬものがある。

金梨地石山寺高蒔絵源氏簞司　徳川時代



写真は，江戸時代初期の代表作と称せられる初音棚（幸阿弥長重三カ年にして完成した）と制作技法同じく総梨地に山水楼閣を蒔絵した華麗精致，穏稚眼を驚かすものであるが，特に総梨地の上に施された美しさは無類である。

2. 金梨地の有する魅力と純金箔梨地

前述の如く藤原期に於ける梨地粉の発見は近世に至る迄其需要は上昇の一途を辿った。これは時代を問わず多くの人々に魅力があることを立証する事にもなるのであって，さうした梨地の魅力的な美は，透明度の漆液を透して底の方から重なり合って輝く黄金の美しさ，光線を受けて反射する金属のもつ特種性を上手に利用した点にある。近年輸出漆器等に盛んに利用好評を博した玉蟲塗も，梨地と同じ効果をねらったものと言えよう。以上の様に大衆の心を魅了せずにおかぬ梨地も材質が金であるために，大量に使用せねばならぬ場合，又は製産的工芸品等には残念乍不適当でその代用品として『銀梨地』『錫梨地』が登場した。しかし銀及び錫梨地は安価に出来て大衆性はあるが，金に比して貴品乏しく光沢も弱く，数年後には酸化物を漆の表面に吹き出しあばたの様になる欠点があるので，私は数年前よりこれ等の心配もなく安価で美しい梨地をと念願，研究したのが以下述べんとする純金箔梨地粉である。

3. 新究研の純金箔梨地粉と従来の金梨地粉使用量の比較

新研究の純金箔梨地粉は言う迄もなく主材が純金故絶対に酸化の心配なく，1匁の地金にて径3寸5分四方のもの 200枚以上も製産される極薄い金箔なれば，金梨地粉の 1/01 程度の量で充分である。箔は薄くとも光沢も強く梨地として製品となれば専門家といえども識別困難である。次ぎに従来の金梨地との同面積に於ける使用量を示すと。

純金箔梨地粉使用量　(濃蒔)

名　称	使用量	面　積
大　1	2分4厘	1尺平方
大　2	2　分	〃
常　3	1分4厘	〃

金梨地粉使用量　(濃蒔)

名　称	使用量	面　積
大　1	3匁3分	1尺平方
大　2	2匁7分	〃
常　3	1匁8分	〃

以上の表に示した如く材料費のみでも大差を生じ，安価な金梨地製品が出来る事になるのである。猶参考迄に製金箔100枚に付き地金の所要量を記す。

製箔地金所要量

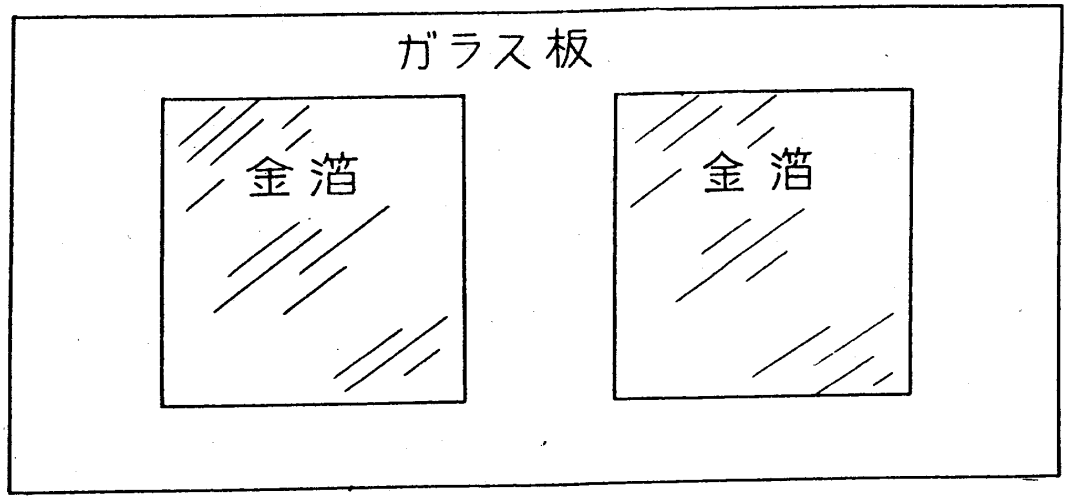
名　称	地　金	枚　数
並　箔	4分——4分5厘	100
2枚掛	5分——5分5厘	100
3枚掛	6分	100

金箔は成可く厚目のもの程良好だが2枚掛位が1番適当と思われる。

4. 純金箔梨地粉製造工程

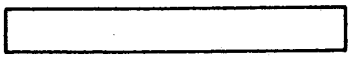
ガラス板数枚（5寸～9寸5分）を用意して第1図に示す如く，1枚のガラス板に2枚づつ金箔を置くのであるが，金箔を置く場合摺漆をするが是は必ず朱合蠟色漆を使用する。

第　一　図

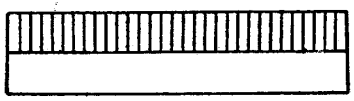


第二図以下はガラス板に漆液，金箔等を置いた断面を現わしたもの，第二図はガラス板断面

第　二　図

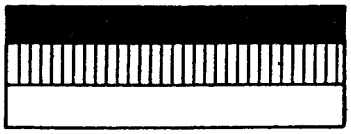


第　三　図

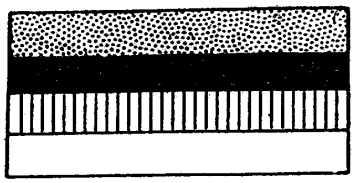


第三図はガラス板に金箔を附着させるために朱合蠟色漆にて摺漆をしたものを現わす。

第　四　図

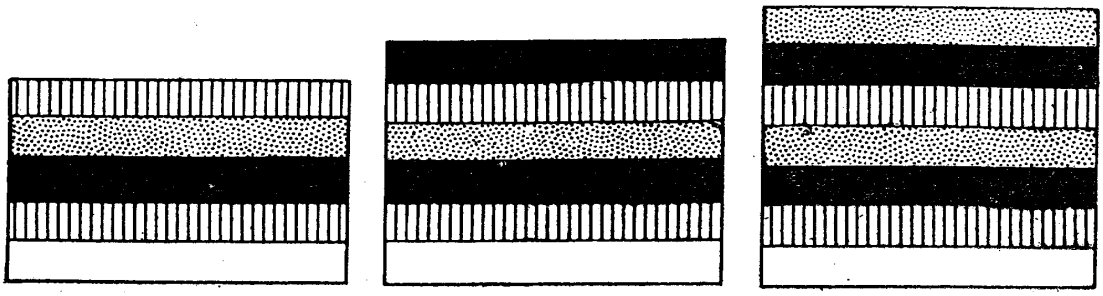


第　五　図



第四図第一回金箔を附着せしめたもの。第五図は金箔の上を薄く梨地漆にて塗る。

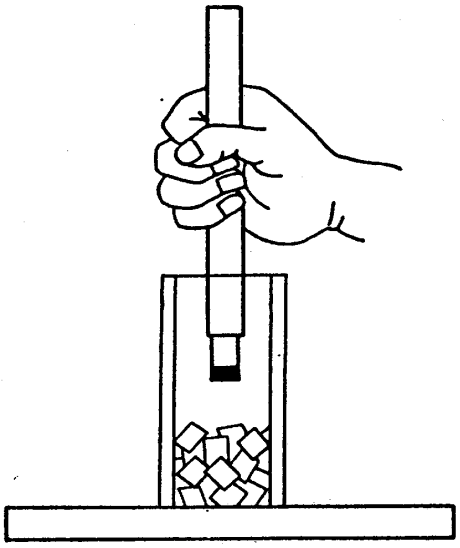
第六図　　第七図　　第八図



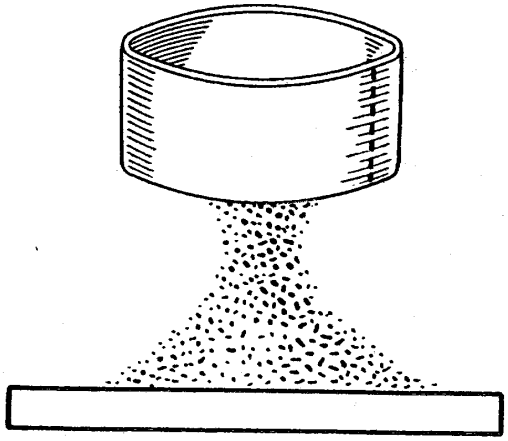
第六図先に塗た梨地漆の光沢を炭粉にて少々消し再び朱合蠟色漆にて摺漆を行う。これは二回目の金箔を附着させるためである。

第七図二度目の金箔附着を現わす。

第八図は二度目の金箔の上を又梨地漆にて塗り込んだものを現わす。以上でガラス板の上に漆と金箔のサンドイッチが出来上った事になる。



第九図



第十図

これを充分乾燥させ，水にガラス板共浸漬数時間放置する。そして水のため自然にガラス板から遊離した金箔と漆の薄い層をよく乾燥して水分を去り，厚いガラス盤の上で刀物で刻むのである。

普通盤の上で刻んでも軽いので仲々刻みにくい故，第九図の様にガラス盤の上に更に底のないガラスの筒を伏せ，其中へ荒く刻んだ箔のサンドイッチを入れ，上より細い鑿様の（5分か6分位）刀物で突いて細かく刻む，そして適度に刻まれた時篩にかけ何種類かの荒さに篩い分ける（第十図）

5. 純金，箔梨地粉使用法及びその他

純金箔梨地粉の附け方も蒔方も普通金梨地粉と同様筒蒔であるが，蒔き終ってよく乾燥した時梨地漆で塗込むのであるが，一度に厚く塗らぬ様に注意して薄く数回塗重ねて仕上た方が良い結果を得る。又粉は非常に軽い故部屋を〆切って風の入らぬ様注意して蒔く必要がある。金箔梨地粉は粉の時すでに漆加工を施してある故，研安く安易であるが非常に薄い故研破らぬ様注意を要する。又一面に蒔く総梨地式のものよりも文様の一部に使用する方が利用価値が高いが反対に，建築高級車輛内部，船舶内部装飾等更に広い場所に応用しても，他の塗料にない美しさを表現出来ると思う。粒子の荒さは成可荒目のものの方がよい。

猶終りに記し度い事がある。それは私の箔梨地と同様の研究を工芸技術院の谷川亨蔵氏も研究して居られる。先年お互いに試験のデーターを見せ合って全く遇然の一致に驚いた。但し谷川氏と私と少し異る点がある。それは谷川氏の方は金箔は一枚でやや厚目のものを使用されるのである。昨秋も試験場でお目にかかったが，一層熱心に試作をやって居られた。其後御手紙に依れば氏は箔梨地の研究作品数百点を計画して居られる由，其熱心さには全く敬服の外ない一層優秀変化に富む御研究の御完成をお祈りする。